

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」

2017年度第2回研究会（通算第7回目）

・日時：2017年8月21日（月）13:00-17:00（非公開），2017年8月22日（火）10:30-17:00（公開）懇親会（事前予約者のみ 18:00-20:00），2017年8月23日（水）10:00-17:30（公開）18:00-20:00（非公開），2017年8月24日（木）10:00-17:00（公開）※22日～24日：9時30分より準備，24日：17時～19時，後片付け

・場所：東京外国語大学アゴラ・グローバル，プロメテウス・ホール

・使用言語：フランス語，英語，日本語

・共催：AA 研共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケーヌ』研究——新たな政治=文化学のために」，科研費基盤研究(B)「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」（研究代表者：星埜守之（東京大学），課題番号：17H02328），挑戦的研究(萌芽)「人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究」（研究代表者：佐久間寛，課題番号：17K18480），AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロマクロ系の連関2」

・後援：(株)サイマル・インターナショナル

8月21日（非公開）

全員

準備と打ち合わせ

国際シンポジウム『プレザンス・アフリケーヌ』研究——超域的黒人文化運動の歴史，記憶，現在

8月22日

開会の辞と基調講演

ロミュアルド・フォンクア（パリ第4大学，『プレザンス・アフリケーヌ』誌編集長）

「『プレザンス・アフリケーヌ』：理念の歴史，行動する思想」

第1部：群像

立花英裕（早稲田大学）

「アリウヌ・ディオップとエメ・セゼール」

ファティマ・ドウムビア（フェリックス・ウフェ・ボワニ大学）

「クワメ・ンクルマ：いまなお現前する一個のアフリカ」

シェイク・チャム (オハイオ州立大学)

「アフリカ中心的ネグリチュード：21世紀において近代性に対するサンゴールとグリッサンの
対抗文化論を再考する」

ジョルジュ・ベルトラン (独立研究者, フランス)

「マルセル・グリオール, 曖昧なアフリカ性：20世紀を生きた1人の男の思考の変遷」

モニカ・ブロードニカ (オハイオ州立大学)

「アマドゥ・ハンパテ・バと在来形而上学への呼びかけ」

懇親会 (事前予約者のみ 18:00~)

8月23日

第2部：言語と文学

中村隆之 (AA研共同研究員, 大東文化大学)

「文学, 言語, 政治：『国民詩』論争をめぐる争点」

廣田郷土 (パリ第8大学博士課程)

「脱植民地化への未完の対話：『プレゼンス・アフリケーヌ』におけるエメ・セゼール/エド
ゥアール・グリッサン」

サリー・ステニエ (アンティエユ大学博士課程)

「Lang a pep-la kont lang a met-la? : 教育表象におけるグアドループ的言語問題の反響」

ジョサナ・ナラシマン (ムンバイ大学博士課程)

「『プレゼンス・アフリケーヌ』における女性の著述：ファトゥ・ジョムの思想革命」

松井裕史 (金城学院大学)

「私とはわれわれという他者である：ジョゼフ・ゾベル『黒人小屋通り』」

第3部：芸術, メディア, 受容

ロジェ・ソメ (ストラスブール大学)

「『プレゼンス・アフリケーヌ』における黒人芸術 vs アフリカ芸術」

ブアタ・マレラ (マヨット大学)

「雑誌空間における『プレゼンス・アフリケーヌ』」

オベッド・ンクンズィマナ (ニュー・ブランズウィック大学)

「古傷を再考/治療(ルポンセ)する：映画『アダンガマン』と『アフランス』における奴隷制
と植民地化のポスト植民地的再読」

ウジェーヌ・タヴァレス (アッサン・セック大学)

「『プレゼンス・アフリケーヌ』とポルトガル語圏アフリカにおける意識覚醒のプロセス：カ
ーボヴェルデの場合」

フランソワーズ・ノディヨン (コンコルディア大学)

「アフリカの現前(プレゼンス)か不在(アブザンス)か：1958年から1980年にかけてのル・モン

ド・ディプロマティークにおける『プレザンス・アフリケーヌ』誌の受容」
研究打ち合わせ（非公開）@AA 研 301

8月24日

第4部：政治思想

小川了（AA 研共同研究員，東京外国語大学名誉教授）

「Hosties Noires に至る道：B. ジャーニュ，W.E.B. デュボイス から L. セダール・サンゴール へ」

中尾沙季子（EHESS 博士課程）

「パン・アフリカニズムかナショナリズムか：脱植民地期における文化政策形成の場としての『プレザンス・アフリケーヌ』」

ジョナス・ラノ（ロレーヌ大学）

「クレオリチュードとイデオロギー的奴隷逃亡：レオン・ゴントラン・ダマスをめぐる」

アンヌ・ピリウ（アフリカ-世界学際ネットワーク会員）

「1950年代フランス語圏における民族主義的知識人形成の回顧：場，時，人」

イブラヒム・ヤハヤ（アブドゥ・ムムニ大学）

「『プレザンス・アフリケーヌ』：継続する闘争」

全員

総合討論と閉会の辞

概要

2017年度第2回研究会として、計3日間にわたる国際シンポジウム「『プレザンス・アフリケーヌ』研究——超域的黒人文化運動の歴史、記憶、現在」を上記日時に開催した。以下、敬称は省略する。

シンポジウムは公募により選ばれた20本の研究発表および『プレザンス・アフリケーヌ』誌（以下、PA と略記）の編集長にしてパリ＝ソルボンヌ大学教授ロミュアルド・フォンクアの基調講演、ならびに総合討論により構成された。また各日とも総合司会を佐久間寛（AA 研）が務め、日仏同時通訳はサイマル・インターナショナルが担当した。

研究発表は、4つのセクション（第1部：群像、第2部：言語と文学、第3部：芸術、メディア、受容、第4部：政治思想）にしたがって行われた。

初日（8月22日）の午前の部は、まず西井涼子がAA 研基幹研究人類学班を代表して共催者挨拶をしたのち、AA 研所長の飯塚正人および東京外国語大学副学長の岩崎稔が開会の辞を述べた。アジェ・セレストアン・ロモ・ミヤジオム（AA 研、ストラスブール大学）によるシンポジウムの趣旨説明を受けて、フォンクアが基調講演「『プレザンス・アフリケーヌ』：理念の歴史、行動する思想」と題した発表を行なった。フォンクアの基調講演は、この雑誌と同名の出版社がたどってきた歴史とその意義を想起させる重要なものとなった。

午後の部では、フォンクア座長のもと「第1部：群像」のセッションが行われた。発表者は立花英裕（早稲田大学）、ファティマ・ドゥンビア（フェリックス・ウフェ・ボワニ大学）、シェイク・チャム（オハイオ州立大学）、ジョルジュ・ベルトラン（独立研究者、フランス）、モニカ・ブロードニカ（オハイオ州立大学）の5名である。立花はエメ・セゼールとアリウヌ・ジョップの関係を、ドゥンビアはンクルマ思想を、チャムはサンゴールとグリッサンの共通点を、ベルトランはマルセル・グリオールを、ブロードニカはアマドゥ・ハンパテ・バのアフリカ思想をそれぞれ論じた。それぞれの発表言語は、フランス語（ドゥンビア、ベルトラン）日本語（立花）、英語（チャム、ブロードニカ）である。

セッション終了後、発表者ならびに参加者は同時開催中の『プレザンス・アフリケーヌ』展をフォンクアのガイドのもとに巡った。

2日目（8月23日）の午前の部はチャム座長のもと「第2部：言語と文学」のセッションが行われた。発表者は中村隆之（AA 研共同研究員、大東文化大学）、廣田郷土（パリ第8大学博士課程）、サリー・ステニエ（アンティエユ大学博士課程）、ジョサナ・ナラシマン（ムンバイ大学博士課程）、松井裕史（金城学院大学）の5名である。中村は「国民詩」論争を、廣田はグリッサンとセゼールの関係を、ステニエはグアドループにおけるクレオール語使用を、ナラシマンはファトゥ・ジョムを、松井はゾベルの『黒人小屋通り』を主題とした。それぞれの発表言語は、フランス語（中村、廣田、ステニエ、松井）、英語（ナラシマン）である。

セッション終了後は、初日に引き続き、フォンクアのガイドによる『プレザンス・アフリケーヌ』展のツアーを実施した。

午後の部は小川座長のもと「第3部：芸術、メディア、受容」が行われた。発表者はロジェ・ソメ（ストラスブール大学）、ブアタ・マレラ（マヨット大学）、オベッド・ンクンズィマナ（ニュー・ブランズウィック大学）、ウジェーヌ・タヴァレス（アッサン・セック大学）、フランソワーズ・ノディオン（コンコルディア大学）の5名である。ソメはアフリカ芸術を、マレラはPA誌の雑誌としての特徴を、ンクンズィマナは奴隷制と植民地化を主題とする映画を、タヴァレスはポルトガル語圏アフリカの雑誌を、ノディオンはル・モンド・ディプロマティークにおけるPA誌の受容を論じた。発表言語はすべてフランス語である。

3日目（8月24日）の午前の部はソメ座長のもと「第4部：政治思想」が行われた。発表者は小川了（AA 研共同研究員、東京外国語大学名誉教授）、中尾沙季子（EHESS 博士課程）、ジョナス・ラノ（ロレーヌ大学）、イブラヒム・ヤハヤ（アブドゥ・ムムニ大学）の4名である。小川はサンゴールの詩に見られるブレイズ・ジャーニュの影を、中尾はアフリカ文化協会とアフリカ国家の文化政策との関係を、ラノはレオン＝ゴントラン・ダマスにおけるクレオリチュードを、ヤハヤはフランス語雑誌としてのPA誌の争点をそれぞれ論じた。発表言語はすべてフランス語である。なお当初予定していたアンヌ・ピリウの発表は来日キャンセルのため行われなかった。

午後の部は、総合討論に充てられた。ロモ・ミヤジオムの司会のもと、各座長がそれぞれのセッションを振り返った後、総合討議に移った。討論では、アフリカにおける言語の問題、ア

ジア人とアフリカ人を結びつける紐帯としてバンドン会議の精神に今日立ち返ることの意義、PA 誌が未来に果たす役割とその展望などが真剣に討論された。これらの議論をロモ・ミヤジオムが取りまとめたのち、星埜守之（AA 研共同研究員、東京大学）が総評を述べ、佐久間寛の閉会の辞でもって3日間にわたるシンポジウムが終了した。

来場者数は、発表者をはじめとする関係者をふくめて159名に及んだ。延べ人数は集計していないが、少なくとも来場者の3分の1は連日参加していたことを付記しておく。

（文責：中村）